レポート
これからの林業、木材、住宅、自然エネを考えるシンポジウム（長野）を終えて

作成

2012-04-26

アーチ･ジョイント･ビジョン

池田憲昭

arch joint vision

Noriaki Ikeda 池田憲昭

Fabrik Sonntag 4a, 79183 Waldkirch, Germany
Telefon: +49-7681-4978252 Fax: 4978254
E-Mail: ikeda@arch-joint-vision.com
Web: www.arch-joint-vision.com

今回のシンポジウム開催のいきさつ

２０１２年３月１８日（日）、長野市にて、県産材販路開拓協議会、信濃の心をつなぐ家づくりグループ、森とくらしと産業ネットワークの主催のもと「これからの林業、木材、住宅、自然エネを考えるシンポジウム」が開催された。午前中は、ドイツの取組みとコンセプトを紹介するレクチャー、午後は「未来会議」の手法を用いたワークショップというプログラムであった。弊社代表池田憲昭と、同僚でドイツ在住環境ジャーナリストの村上敦が、レクチャーの講師、ワークショップのファシリテーターとして招かれ、主催者、並びに協力者の長野県、自然エネルギー信州ネットとともに、この１日のイベントを行った。

今回のイベントの企画の背景には、２００９年５月と２０１０年７月の２回行われた、県産材販路開拓協議会のドイツ･シュヴァルツヴァルト視察旅行がある。いずれも、弊社池田が、林業、木材産業、住宅、都市計画のテーマでコーディネートした。林業、木材加工業、建築業、家具産業と、長野県から様々な分野の方々の参加があったが、参加者それぞれに、感銘と刺激を受けて帰られた。その参加者の中でも、２回ともグループを率いてこられた和建築設計事務所の青木和壽氏は特に、ドイツの考え方や事例が、長野県の林業、木材産業、住宅の未来を考える上で非常にためになる、現状を打破するための重要なメッセージを含んでいると感じられ、視察後も、弊社池田と交流を継続された。また、今回のイベントはレクチャーにワークショップを組み合わせるという構成であったが、２回目の視察旅行で池田がアドリブで短時間行った「未来会議」に、青木氏を始め、参加者の方々が高い関心をもたれたこと、「長野でいつか未来会議を開催したい」と現地でワインを飲みながら話し合ったことがきっかけである。

未来会議とは

「未来会議」（正式には「未来探索会議」）というワークショップの手法は、アメリカのマーヴィン･ワイズボード氏が１９９０年代はじめに確立し、アメリカとヨーロッパを中心に、行政、企業、NPO など様々な機関によって、さまざまな分野で頻繁に用いられている。とりわけ、ローカルアジェンダのプロジェクトでの使用が顕著である。未来会議は、様々な分野、職種、階層の人々（様々なステークホルダー）が一同に会し、一緒に共通の未来像を描き、目標を定め、そこにたどり着くための具体的な行動計画（アクションプラン）を作成する会議プロセスである。基本的に、以下のような段取りで会議が進行される。

1) 自分と対象テーマの過去を振り返る
2) 現状認識
3) 不満に思うこと、誇りに思うこと（感情を共有する）
4) 将来のビジョンを描く

5) ビジョンに沿って明確な目標を定義
6) プロジェクト考案、アクションプラン作成

通常、３０人から６０人の参加者で、５から８グループに別けて、このプロセスを２日から３日かけて集中的に行うが、今回の長野での半日のワークショップでは、比較的素早いテンポで、１と３と４を行った。次回、この会議を完結させるのであれば、残りの２と５と６を行う必要がある。

未来会議の特徴は、ポジティブな未来像を参加者全員で描き、具体的な目標の定義によって、より具体的な像にし、未来から現在に時間軸を戻していきながら、未来像にたどりつくために、それぞれのタイミングで「何をするべきか」を考えることを、参加者に促すことである。

新しい思考方法で現状打破

日本においても、他の国々においても、通常の思考、行動様式は、現在の環境、状況、人材、枠組みのなかで、「何ができるか」を考え、できることを一つずつステップ･バイ･ステップで積み上げていくやり方である。 このやり方の利点は、現状に合わせて、可能なことを一つずつやっていくので、最初の取掛りのハードルが低く、スタートしやすく、迅速に作業を進めることができることである。一方、この方法では、中長期のビジョンや到達点を定義することが行われないので、参加者それぞれが、どこに向かっているのかがわからない場合が多く、その取組みが、未来にとって非生産的で逆効果である場合に、それに気づくことができない、気づくのが遅くなることがある。また、取組みの途中で、批判や懸念が出た場合、どこに向かうのかが明確でないために、すなわち明確な指針や基準がないために、公平で客観的な議論にならず、さまざまな意見によって右往左往してしまい、結局、「長いモノにまかれる」的に、影響力や力のある人の意見やその場の感情論に流されてしまうことが多くある。とりわけ、歴史文化的に、調和的な人間関係を重視し、社会や組織の中での個人の役割や振舞の規範意識が強い日本人においては、ステップ･バイ･ステップ方式における上述したデメリットがより生じやすくなる。また、最初の取掛りの時点で、現状の枠組みを基準にして思考を行うので、画期的、革新的なものも生まれにくい。

未来会議は、上記の問題を解決できる、もしくは問題が起こるのを防ぐことができる。参加者は、最初に、過去と現状認識を行いながらも、その次にポジティブなものもネガティブなものも正直に感情を吐き出す。これにより、過去と現在の繋がりのなかに自分をしっかり位置づけながらも、現在の枠組みに捕われない「自由」な精神状態をつくり、１０年、２０年先の未来像をみんなで

描く。この未来像に沿って明確な目標を決め、時間を未来から現在に戻しながら行動計画を作っていく。これにより、まず、現状の環境、法律や制度、人材に捕われない思考ができる。通常の思考では生み出されない画期的、革新的なものも生まれやすくなる。また、行動の途中で、内外部から批判や中傷が行われたとしても、最初にみんなで未来像を描き、具体的な目標を共有しているので、それが議論の指針となり、客観的で建設的な議論が行われ、生産的な改善案、修正案が生まれる。威圧的な意見や人間関係、感情論に流されにくくなる。また、ポジティブな未来像をプロジェクトの参加者がしっかりと心の中に植え付け、内面化することができていれば、プロセスの途中でも、絶えずポジティブで生産的な発想になり、非建設的な議論は起こりにくくなる。

未来を想像するためのインプット作業

未来会議では、通常、２０年後、３０年後、もしくは５０年後の未来を想像し、構築していくことを参加者に促すが、日本でも他の国々でも、大半の人々は、普段そのような思考をすることがない。特に日本では、過去の「事例」や「経験」を重視して、それをベースにモノをつくっていくやり方が歴史的文化的に尊ばれている。未来を自由に発想し、それを目標にして行動計画を作成する、という「演繹的」思考と作業に関しては、信頼度や認知度が低く、学校や社会教育の中でも、この手法の訓練はほとんど行われていない。

普段、未来について具体的に考えを巡らすことを行っていない、演繹的な思考を行っていない人々にとっては、その作業をいきなり始めるのは難しい。そのため、未来会議においては、本会議の前に準備期間が設けられることが多い。この期間中、本会議でグループリーダー（グループの司会、まとめ役）となる有志によるコアチームが結成され、会議のメインファシリテーター（外部のプロが担当することが多い）とともに、会議の具体的な進行を決め、参加者に対して広報活動を行う。この期間に、コアチームは、参加者に対して、未来への発想を促すための活動をする。例えば手紙や新聞での宣伝、前イベントなどである。また、未来を先取りした革新的なことを行い成功している地域や団体から専門家を呼んで、講演会の開催や、会議に参加する人々を集め、他の地域や国の先進事例を視察に行くことも、よく行われる。

今回の長野県での未来会議では、開催までの準備期間が短かったことが理由であるが、上記のような通常の包括的準備作業は行うことができなかった。メインファシリテーターの池田と主催者代表の青木氏のやり取りを中心に会議の広報、参加者募集が行われ、グループリーダーの方々には、書面によって事前に会議の主旨を理解してもらい、当日簡単な打合せを行っただけで、会議に挑んだ。未来会議の成功は、グループリーダーのモチベーションと理解、能力に依るところが

大きい。今回、入念な準備や打合せができなかったにも関わらず、参加者も主催者もメインファシリテーターも満足いく結果をもたらすことができたのは、グループリーダーを引き受けていただいた方々が、市民会議やワークショップの司会を経験したことがある方々が大半で、未来会議の主旨を素早く理解していただき、フレキシブルに対応いただいいたからである。主催者側の人選とグループリーダーの方々の献身に感謝の意を表したい。

未来会議の前に、池田と村上が、ドイツの森林林業、木材産業、建築、都市計画、エネルギーや、日本の現状やポテンシャルについてレクチャーをする機会を与えていただいたが、これは参加者が長野の未来を発想するための「インプット」として有効であったと思っている。ただし、長野の未来を考え決めるのは、あくまでも参加者であるので、池田、村上の情報提供は、専門家の関点から、事実とその背景にある考え方、コンセプトの紹介、多面的な視点からの分析、そしてそこから合理的に導きだされる大まかな方向性（提案）にとどめた。できるだけ中立性と公平性を保つようにし、具体的な提案をすることは避け、持論を強要するような発言も行わなかったが、主催者、参加者も、そのように感じていただけたのであれば幸いである。

成功の秘訣は明確なルールと雰囲気

未来会議は、様々なステークホルダーが集い、自由に意見を出し合い、共通のビジョンを描き、行動計画を作成していくプロセスである。様々な興味関心、立場の人々が一同に集うと、多面的な視点で多彩なアイデアが生まれる、というメリットがある反面、話がまとまらない、分裂する、というリスクもある。未来会議は、そのリスクを最低限に押さえるために、いくつかの明確なルールを設けている。代表的なものは、各ステージごとの時間と課題を厳守する、他人への中傷はしない、自分の意見を押し付けない、話し合いの仲間に対して敬意と尊敬を払ったコミュニケーションをする、などであるが、今回は追加で、社会的な立場や年齢は関係なく、一個人として参加してもらう、結果報告は公開するが、参加者の名前は載せない、会議中マスコミは遮断する、カメラ、ビデオ撮影は最低限に押さえる、等のルールを設け、意見が出やすい自由で守られた雰囲気づくりを行った。会議中、ルール違反をした人には、イエローカード（警告）とレットカード（退場）を出す、と厳しい措置を取ること宣言したが、幸運なことに、今回ルール違反を犯す参加者は出ずに、平和的で友好的な雰囲気で会議が進行した。

未来会議は、ポジティブな未来を想像する会議であり、そのためには、会場が、未来を考える意欲が湧いてくるような雰囲気であることが重要なポイントになる。太陽光が入る明るい空間、緑の景色、会場の明るい装飾などである。残念ながら今回は、開催地と会場の都合もあり、窓がな

い、飾り気がない、換気が十分でない（二酸化炭素が充満して眠くなる）、と最適でない空間であったが、そこは参加者の方々の熱気と明るさで補う事ができたのではないかと思う。また、今回は、普通の会議に比べて、頻繁に休憩を入れたが、この休憩時間は、未来会議にとって重要な構成要素である。この時間に参加者は心と体と頭のリフレッシュをする。他のグループの人と意見交換や会話をしたり、一人瞑想にふけったりすることで、新たな充実した気持ちで次のステージに挑むことができる。通常の未来会議では、この休憩時間に、お茶やコーヒー、お菓子やケーキを用意し、雰囲気を高めることを行うが、これも残念ながら、会場の都合で行う事ができなかった。今回の会場は、日本の会議室においては平均的であり、ここに書いた未来会議の要望を満たしてもらえる環境とサービスを備えた施設を日本で探すのは困難であることは承知しているが、次回は、よりいい環境ときめ細かなサービスを提供してくれる会議室でワークショップを行ってみたい。

謝辞

今回、講師、メインファシリテーターとして、この意味のあるシンポジウムに関わらせていただいた池田（アーチ･ジョイント･ビジョン）、村上（オフィス村上）、そしてアシスタントの中尾（株式会社自然産業研究所）は、全体的には、今回のシンポジウムとその結果に大きな満足感をいだいている。とりわけ、未来会議で作成された、各グループの未来像は、情熱、愛情、奇抜な発想、遊び心などが詰まった素晴らしい作品であり、長野県にとっての大きな財産になるのではないかと思う。

気候変動、資源枯渇などの環境問題、貧富差の拡大、地域過疎化、コミュニティの崩壊、金融危機などの社会経済問題は、産業、政治などあらゆる分野で、情報や権力や権限が一局集中し停滞している社会構造に根本的な原因があるのではないかと私は考えている。公平で人々が安心して生き生きと暮らせる豊かな地域をつくるためには、一極集中、縦方向の一方通行、不透明な社会システムを、分散型で、横にも縦にもネットワークが結ばれ、双方向に伝達があって、透明性のある社会システムに変換していくことが必要だ。「未来会議」は、その社会変換を行っていくための、一つの非常に有効な手段だと思う。

今回の主催者である、県産材販路開拓協議会、信濃の心をつなぐ家づくりグループ、森と暮らしと産業ネットワーク、協力者である長野県と自然エネルルギー信州ネット、そして後援者である信州木造住宅協会、脇田美術館、有賀建具店、有限会社和建築設計事務所、株式会社勝野木材、木童、小林木材株式会社、グルーラムハウス株式会社、信濃毎日新聞、株式会社住まい工房、征

矢野建材株式会社、北信商健株式会社の皆様の心暖かいご支援とご協力に、心から感謝の意を表します。特に、今回のコーディネーターとして、日独間の電話やメールでのやりとりで、こちらの要望を真摯に受け止めていただき、 協力団体探し、資金集め、広報と、開催準備と当日の進行という、大変な作業を、長野県への熱い気持ちと粘り強さをもって行っていただいた青木和壽さんには、特段の感謝とお礼を申し上げます。

２０１２年4月２７日

池田憲昭